

## 自己評価報告書

平成 23 年 4 月 21 日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730101

研究課題名 (和文) 後期サラマンカ学派の政治理論——カトリック的近代国家論の体系化

研究課題名 (英文) Political Thought of the Later School of Salamanca: Development of the Modern Catholic Theory of the State

## 研究代表者

松森 奈津子 (MATSUMORI NATSUKO)

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：80337873

研究分野：政治思想史

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：サラマンカ学派、スコラ、スペイン、カトリック、ビトリア、スアレス、モリナ、16 世紀

## 1. 研究計画の概要

16 世紀後半期スペインの学界に強い影響力をもった後期サラマンカ学派 (c. 1576-1615, メディナからスワレス) の政治理論は、後に主流となる主権論とは別の観点から脱中世型権力理解を提示した点で注目される。本研究は、近代カトリシズムに基づくその権力・国家論の特質を検討し、初期近代政治思想史におけるサラマンカ学派の地位と意義を考察することを目的としている。具体的には、トマス、コンラドゥス、トルケマダに代表される中世キリスト教世界の権力観から、マキアヴェッリ、ボダン、ホブズへと展開してゆく近代主権国家論に至る変遷過程を追い、それぞれとの異同に着目しながら後期サラマンカ学派の理論的性質を分析する。

## 2. 研究の進捗状況

本研究は、①資料調査 (平成 20 年度)、②草稿執筆 (同 21、22 年度)、③成果発表 (同 23 年度) の三期に分けて進められている。

平成20年度は、第一に、後期サラマンカ学派が依拠する前期サラマンカ学派の理論を体系的に整理し直すことによって、本研究の分析枠組を整えた。第二に、後期サラマンカ学派のテキスト調査を通じて、底本の確定と理論展開の把握に努めた。具体的には、平成17～19年度科学研究費補助金を受けて明らかにした前期サラマンカ学派と、20年度より分析を開始した後期サラマンカ学派の理論的異同を整理すべく、資料の調査と検討を行い、その中間的成果を研究会報告の形で公にした。また、教育面においても研究成果を還元すべ

く、通常講義に加え、特別講義を行った。

平成21年度は、前年度に調査した原典に基づき、後期サラマンカ学派の世俗権力観をめぐる内在的分析を行い、その理論展開の過程を明らかにした。具体的には、前期サラマンカ学派との理論的異同を明らかにする作業を完結し、著書、雑誌論文、口頭発表論文として公にした。著書はその後、第31回サントリー学芸賞 (思想・歴史部門) を受賞した。同時に、各思想家の主著を読み込むことによって、自然性と倫理性に礎をおく後期サラマンカ学派の世俗権力観の源泉と理論的特色を検討した。また、教育面でも研究成果を還元すべく、通常講義に加え、特別講義を行った。

平成22年度は、21年度に明らかにした後期サラマンカ学派の世俗権力観の全体像を、中世から近代に至る国家論の変遷という文脈に位置づける通時的分析を試みた。具体的には、中世思想を代表するトマス、トルケマダ、カイエタヌスら、および近代理論を構築したマキアヴェッリ、ボダン、グロティウスらと対照させながら、同学派の特質を検討した。その成果は、著書、口頭発表論文として公になっている。同時に、これまでの研究成果をまとめた英語著作の執筆を開始した。

## 3. 現在までの達成度

区分：①当初の計画以上に進展している。  
理由：本科学研究費補助金応募時に記載した研究計画は順調に遂行され、各思想家の主著を中心とした入念なテキスト解釈に基づき、この学派の理論展開と相関関係の見取り図を得ることができた。その成果は、著書 (単

著一冊、分担著三冊、解説執筆一冊)、単著論文(査読つき学術雑誌一本、口頭発表八本)、特別講義二回によって、多様な立場、専門分野の読者、聴衆に向けて公にされている。

#### 4. 今後の研究の推進方策

平成23年度は、4年間の作業を総括し、その成果を公にする発表期間となる。20年度に調査した資料、21年度に行った後期サラマンカ学派の世俗権力観をめぐる内在的分析、22年度に行った中世から近代に至る国家論の変遷をめぐる通時的分析に基づき、最終成果を発表する。

第一に、前年度までの執筆作業を、本研究の最終的な成果として学術論文の形で完成させる。日本語と英語でそれぞれ一本ずつの研究成果が見込まれている。その際、国内外における最新の研究成果を摂取し、論文に反映させるためにも、一次・二次文献の調査を継続することが肝要である。

第二に、完成論文を公刊し、客観的な外部評価を受ける。これと並行して、研究会やシンポジウムにおいて口頭報告の形で、その成果を広く公にし、批判を受ける機会とする。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 松森奈津子、「大航海時代と文明化——ピトリアによる『文明』基準の転換を中心に」、『比較文明』第25号、2009年、23-38頁、査読有。

[学会発表] (計8件)

- ① 松森奈津子、「グローバルな秩序とインディアス問題——サラマンカ学派にみる世界観の転換」、第32回スペイン史学会大会、2010年10月17日、駒澤大学。

[図書] (計5件)

- ① 松森奈津子、関西大学マイノリティ研究センター、「16世紀スペインにおける恩寵と自由意志——前モリナ主義からモリナ主義へ」(孝忠延夫ほか編『「マイノリティ」という視角(上)』)、2011年、233-253頁。
- ② 松森奈津子、風行社、「移動、遭遇、戦争——インディアス問題にみる世界観の転換」(押村高編『超える——境界なき政治の予兆』)、2011年、49-75頁。
- ③ 松森奈津子、名古屋大学出版会、『野蛮から秩序へ——インディアス問題とサラマンカ学派』、2009年、402頁。

[その他]

#### (1) 特別講義

- ① 慶應義塾大学法学部特別招聘講師、「グローバル化の光と影——16世紀スペインのインディアス問題を中心に」、2009年12月17日、於慶應義塾大学。
- ② 慶應義塾大学法学部特別招聘講師、『新世界』征服は是か非か——16世紀スペインにおけるインディアス問題」、2008年11月27日、12月4日、於慶應義塾大学。

#### (2) 拙著『野蛮から秩序へ』書評

- ① 『社会思想史研究』第34号、2010年(崎山政毅氏)。
- ② 『日本の神学』第49号、2010年(ハンス・ユージェン・マルクス氏)。
- ③ 『政治思想研究』第10号、2010年(川出良枝氏)。
- ④ 『青山学報』第231号、2010年(押村高氏)。
- ⑤ 『図書新聞』、2009年12月26日付(崎山政毅氏)。
- ⑥ 『朝日新聞』、2009年7月26日付(苅部直氏)。
- ⑦ 『出版ニュース』、2009年7月15日(中旬号)。
- ⑧ 『週刊エコノミスト』、2009年6月23日付(本村凌二氏)。

#### (3) メディア報道

- ① スペイン史学会告知記事、『毎日新聞』、2010年10月6日付夕刊。
- ② サントリー学芸賞受賞、『静岡新聞』、2009年12月19日付夕刊。
- ③ サントリー学芸賞決定、『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』ほか、2009年11月7日付朝刊。